

聖日礼拝説教要旨 【2014年1月26日】

「荒野で叫ぶ声」

イザヤ書
マタイによる福音書

第40章3節～8節
第3章 1節～12節

説教 岡村 恒牧師

荒野で叫ぶ声が、今朝も、この場所で響いています。「このかたは、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう。」(11節)バプテスマのヨハネが語りました。イスラエルの人々はローマ帝国に支配され、救い主の到来を待ちわびながら、繰り返し失望を味わってきました。

そういう絶望の中、バプテスマのヨハネが荒野に現れて叫び始めたのです。多くの人々が耳を傾け、次から次へとヨルダン川で洗礼を受けました。あなたは何かと問われたヨハネは、自分が救い主ではなく、預言者イザヤが語った荒野の声だと自ら告白しました。バプテスマのヨハネは、主イエスとは親戚で、ユダヤ教の祭司の家に生まれ、律法を守って生きてきた人です。しかし神によって導かれ、荒野に出て、らくだの毛ごろもを着物に腰に皮の帯をしめ、叫び始めました。この姿は、列王記に出てくる預言者エリアの服装です(列王記下 1章8節)。預言者たちは、救い主が来られる前に、エリアがもう一度来ることを語ってきました。

その声は叫びます。「主の道を備えよ、その道筋をまっすぐにせよ」(マタイによる福音書 3章3節)自然にできた道は凸凹で、曲がりくねったものです。ローマ帝国は支配地域とローマとの間にまっすぐな舗装道路を作っていました。迅速に軍隊を送り、そこで手に入れた物資をローマに運ぶための道です。荒野で呼ばれる声は叫ぶのです。あなたと神をつなぐ道を平らにしません。人々は、この言葉を聴いて心を打たれました。神との間にまっすぐな道、深い結びつきがないことを知らされたからです。

バプテスマのヨハネは言いました。「悔い改めよ、天国は近づいた」。(2節)悔い改めると言うのは《方向転換》という言葉です。『パウロの回心』といった時に私たちは『改心』とは書きません。悔い改めが、心を改めることではなくて、方向転換をすることだからです。あなたがこれまで背中を向けてきた神に向かって方向転換をして歩き出したら良い、と聖書は語ります。すると、神があなたを真っ直ぐご覧になっていることがわかる。あなたの為に罪と死に対する勝利を得て、凱旋してやって来られる主イエスを、道をまっすぐにしてお迎えをしたらよいのだ、と叫ぶのです。

パリサイ人やサドカイ人も集まってきました。ヨハネは「まむしの子らよ」と非常に厳しい言葉で彼らに語りかけながら、それでもなお、悔い改めて神に立ち返るなら救われる、と招いています。当時、多くのユダヤ人は、自分がアブラハムの子孫だということに希望を持っていました。《信仰の父》アブラハムという人は、神様から特別な祝福を与えられた人物です。ヨハネは言うのです。「自分たちの父にはアブラハムがあるなどと、心の中で思ってもみるな。」(9節)神は石ころからでもアブラハムの子をお創りになることができます。血統など、私たちの救いの役に立たないのです。主イエスへの信仰だけが私たちを救うのです。

ペンテコステの日には弟子たちに降った聖霊の姿は、炎のように分かれた舌のようなものと記されています(使徒行伝 2章3節)。洗礼を受ける時、私たちは皆、聖霊を受けます。主イエスの霊が、私たちの肉体に注ぎ入れられるのです。ヨハネが、「このかたは、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう。」(11節)と言われた出来事が、2,000年にわたって世界中で繰り返し実現しているのです。

イザヤ書は、服役が終わると言う言い方で、救いの到来を告げています(イザヤ書 40章2節)。私たちは、自分自身の罪による囚人でした。本当なら、永遠の滅びという刑に定められていました。しかし主イエスが私たちに代わって、その刑を全部引き受けて下さったので、私たちの服役の時に終わりが来たのです。やがて、主イエスはもう一度来て下さり、私たちを栄光の姿に変えてくださいます。信仰者はその時、キリストの霊、真の命をいただいた者として、神の前に立つのです。

聖書を見ると、悔い改めは人間の側からは起こらないことが分かります(ローマ人への手紙 2章4節)。神の慈愛によって、助け主なる聖霊によって初めて、私たちは悔い改めることができます。人間の力では起こりえない出来事を、私たちは《奇跡》と呼びます。私たちは奇跡によって悔い改めへと導かれ、主イエスを信じる信仰を与えられ、本当の命を得て生きることができるのです。神様を讃美し、私たちひとりひとりの人生に神の奇跡が実現し、完成するように祈り求めましょう。

(記 説教要約奉仕者)